

社会科学習指導案（歴史的分野）

日 時 11月16日2校時
学 級 2年C組
授業者 後藤健次・菊地友樹

1. 単元名 「第一次世界大戦」～総力戦による近代国家の変容～

2. 単元について

本単元は、第一次世界大戦を取り上げる。第一次世界大戦は、世界史上初の「総力戦」である。それ以前の戦争とは比べようもない長期間にわたる戦争と新兵器の登場などにより、多くの兵士や一般市民たちが数多く犠牲となった。戦争に勝利するために、ヨーロッパ列強諸国は、国家の総力（経済力を含めた）を動員して戦争を遂行したのである。こうして、4年余りの第一次世界大戦により、ヨーロッパ列強諸国は大きな損失を受けた。しかしながら他方では、第一次世界大戦が「総力戦」であるがゆえに、さまざまな変化をヨーロッパ諸国に、ひいては全世界にもたらすことになった。総力戦により、ヨーロッパ諸国において、社会や文化、さらには国家の機能までが変化していくことになる。この点を見過ごしてはならない。国家の機能という大きな視点で見ると、第一次世界大戦をきっかけとして、ヨーロッパでは近代国家が現代国家へと変容していくのである。この近代国家から現代国家への変容を、生徒にとらえさせる切り口として、本単元は第一次世界大戦を取り上げたのである。すなわち、近代国家の特徴のどの部分に第一次世界大戦が影響して、国家の機能を変容していくのかを、生徒に考えさせていきたい。その過程を通して生徒たちは、近代国家の後におこる現代国家の特徴をもとらえることになるのである。

そもそも近代国家とはどのような特徴を持つ国家だろうか。歴史をさかのぼると、17世紀のイギリスから始まり、アメリカ合衆国・フランスで市民革命が起こり、それまでの絶対王政国家が崩壊する。その後、登場したナポレオンのヨーロッパ支配により、この市民革命の目指した市民階級の自由や平等という考え方がヨーロッパ全土に広がっていく。その市民階級の自由・平等を背景に、蒸気機関の改良などを契機として、ヨーロッパ諸国では産業革命が起こるのである。この市民革命と産業革命を経て、資本主義社会が成立するのである。このようにして成立した近代国家の特徴は、放任国家の登場といえる。すなわち、市民階級の自由な経済活動が行われるように、国家の機能を国防や治安維持の最小限なものに限定するといういわゆる夜警国家や小さな政府といわれる国家なのである。それは当然、国民（市民）の側からの強い要求でもあった。この近代国家における自由・平等についてはあくまで市民階級に限定されたものであることを、われわれは忘れてはならない。女性には参政権が認められていなかったことからわかるように、一般国民すべてが、自由・平等の恩恵にあずかったわけではないのである。このような、近代国家の対外的な方針は、一国主義といわれるものである。すなわち、自国の繁栄のためには、他国を犠牲にしてもやむを得ないという、きわめて利己的な考え方である。このような対外的な方針に基づいて、産業革命を終えたヨーロッパ列強諸国は、植民地獲得に向けてアフリカやアジアに侵略していくのである。以上のような特徴をもつ近代国家が、第一次世界大戦により、大きく変容していくことになる。

前述したとおり、第一次世界大戦は史上初の「総力戦」である。よって、ヨーロッパ列強諸国は、経済まで含めた国家の総力を、戦争遂行にむけて優先的・効果的に動員する必要性が生じてくる。言い換えると、国家が経済をはじめとする国民生活全般に積極的に関わっていく機能が必要とされるのである。経済でいえば、戦時経済体制の確立である。不足しがちになる資源などの物資を、軍需優先でどのように配分していくのかを計画し実際に配分していくことが国家の役割となる。長期間の戦争で、多くの男性が出征していったため、出征兵士の留守家庭の生活保障や食料の確保なども、新たな国家の機能として求められることとなる。このような国民の要求に応

えられない国家は、第一次世界大戦中に崩壊していくこととなる（ロシア革命やドイツ革命）。また、多くの男性が出征していったため、国内の生産活動に従事するために多くの女性が動員されることになる。これにより、女性の社会進出は大きく前進し、大戦後には相次いで女性参政権が認められ、女性の地位向上がなされたのである。このように、第一次世界大戦をきっかけとして、国家が国民生活や経済活動に対して積極的に関わっていくように変容していったのである。そして、国民の側も自由や平等だけではなく、自分たちの生活の保障など幅広い要求を国家に求めていくのである。それが、体现されたのが大戦後のドイツのワイマール憲法である。このような国家が、まさしく現代国家の特徴である、福祉国家であり干渉国家であり大きな政府なのである。また、現代国家の対外的な方針は、一国主義から協調主義へと変化していることも重要である。第一次世界大戦後の国際連盟の創設やワシントン会議をはじめとする各種会議が開かれ、国際協調のムードが高まっていくのである。

以上のような近代国家から現代国家への変容を、第一次世界大戦を切り口として、生徒にとらえさせていくことを意図した単元である。

次にこの単元を学習する意義について、現行学習指導要領との関連から述べてみたい。現行学習指導要領の歴史的分野全体の目標について次のように書かれている。「・・・我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色を世界の歴史を背景に理解させ、・・・」。更に、現行学習指導要領解説では、次のような説明もある。～「歴史の大きな流れ」を理解させることについては、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色などに着目して他の時代との相違点や共通点を明らかにし、「各時代の特色」を理解させることが大切である～。

よって現行学習指導要領から、歴史学習において「各時代の特色」を理解させるような単元を、我々は意図的に組んでいく必要があるのである。そして、「各時代の特色」を理解させるような単元を組み込むのに効果的なのは、各時代の区切りである。本単元は、近代と現代の間に起こった第一次世界大戦を取り上げた。前述したとおり、第一次世界大戦を切り口とすると、近代と現代のそれぞれの時代の特色が国家像という視点から、生徒にとってとてとらえやすいのである。

また、現行学習指導要領の趣旨からいうと、「我が国の歴史の流れを世界の歴史を背景に理解させ・・・」とあり、あくまで世界の歴史は日本の歴史を学習上での背景となるものである。しかし、今回は、あえてヨーロッパにおける第一次世界大戦を取り上げたのは、第一次世界大戦が近代と現代の転換点になっており、近代・現代のそれぞれの時代の特色が顕著に見えてくるからである。ここで、近代・現代という時代の特色を学習しておくことは、日本における近代と現代のそれぞれの時代の特色を理解するのに大いに役立つことである。現行学習指導要領との関連からも、本単元を学習する意義は十分にあると考えている。

3. 研究との関連

本研究では、「知の構造化」を、次のように定義した。「具体的な資料をもとに読み取った確かな事実同士をより合理的に結びつけ、より本質的な社会認識を築いていく営み」。そして、この「より抽象的な社会認識」というものが、歴史学習においては、「ある時代の政治的な構造」であったり、「ある時代の経済的な構造」であり、それらを生徒につかませていく営みが、歴史学習における「知の構造化」なのである。また、前項で述べたが、このような「時代を大まかにとらえる」という学習は、現行学習指導要領で述べられているものと合致している。本単元では、「近代」と「現代」という二つの時代の「国家の支配の構造」を、第一次世界大戦を切り口として、生徒にとらえさせようとする単元である。

また、本部会が考えている生徒の育てたい力と本単元の関連について述べてみる。本部会では生徒の育てたい力として、次の4点を挙げている。

- ・個々の社会事象を確実に読みとる力。
- ・個々の社会事象を正しく関連づけ、論理的・合理的に説明できる力。
- ・社会のしくみや時代の特色の認識に到達できる力。

・未知の状況を読み解くことができる力。

よって、本単元でも上記の力を育てるための活動を、意図的に設定している。

第一次世界大戦はどのような戦争であったのか、また第一次世界大戦中や戦後にどのような変化が起こったのかを、具体的な資料から把握していく活動を、本単元では最初の段階で設定している。これが把握できていないと、第一次世界大戦の意味を考えようとしても深まらない。

第一次世界大戦についての具体的な事象の読み取りを結びつけて、第一次世界大戦が総力戦であるがゆえに、どのような変化をもたらしたのかを、論理的に説明する活動を、次の段階として設定している。これが、説明できることこそ、第一次世界大戦のもつ意味が本当に理解できたということになるのである。

そして、次に近代国家が現代国家に変容していく過程について、第一次世界大戦がもたらすさまざまな変化と結びつけて考える活動を設定している。この活動を通して生徒は、近代や現代という時代を大まかにとらえることができるのである。

以上のように、本単元は本研究の方向性のもとに開発された一つの例なのである。

※「価値の模索」部会との関連について

「価値の模索」部会では、「価値」を「社会的事象に対する判断の基準となるもの」と定義している。すなわち、われわれが社会的事象に接するということは、われわれの内面に価値的なものが形成されているということである。そして、その社会的事象の正しさによって、形成される価値的なものも変わっていくのである。

本単元では、第一次世界大戦を扱うが、戦争に対して生徒たちが持っている価値観は、後述するが、「悲惨なもの」「悲しいもの」なのである。戦争に対して「悲惨なもの」「悲しいもの」以外の価値観をもっている生徒はごく少数である。しかし、本単元の学習を通して、生徒たちは第一次世界大戦について深く学習する。第一次世界大戦が総力戦ゆえに国家像の変容をもたらし、時代の転換点となったことを理解することによって、戦争に対する生徒の価値観も、「悲惨なもの」「悲しいもの」というモノラル的なものから、更に広がりを持ったものに変容していくことが予想される。この価値の変容こそが、価値の模索であると考えている。

このように、本部会が求めるところの、社会的事象のとらえ方がより深い（より本質的な）ことこそが、より適切な価値を形成するのではないかと考える。よって、「価値の模索」の前提となっているのが、本部会の求める「知の構造化」であると言える。

※「社会への関わり」部会との関連について

「社会への関わり」部会では、育てたい力の一つを、「所属する社会をよりよい方向へ導こうとする意思や行動にもつながる力」と定義している。このために必要なことは、より適切な価値を、生徒個々がもつことである。そして、より適切な価値をもつためには、より正確な事実に基づいた本質的な社会認識をもつことである。

前項で述べたとおり、本単元の学習を通して、生徒たちの戦争に対する価値が変容することが予想される。戦争に対するさまざまな面、「悲惨なもの」「悲しいもの」という面だけではなく「国家像も変容させた」「時代の転換点となった」等という面もあるのだという社会認識をもつことができれば、生徒の戦争に対する価値が広がるのではないだろうか。例えば、現代社会で実際に起こっている戦争に対して、「いけないことだ」とモノラル的に思っているだけでは解決しない。そこで、戦争には背景や別の側面があることに気づくことによって、個人がどのように関わっていくべきかという意思や行動につながっていくのではないだろうか。

まとめると、より正確な事実に基づいた本質的な社会認識をもつことにより、生徒の価値はより適切なものとなり、社会に対して主体的に関わっていこうとする行動につながるのではないだろうか。

4. 生徒の実態

本校生徒に対して行った生徒実態調査の結果を引用しつつ、分析・考察を述べたいと思う。

【学習場面についてのアンケート】

調査対象：附属中 2年 男子 87名 女子 87名 合計 172名 調査月日：4月20日

次のそれぞれの学習場面について、生徒に対して「大切か」「易しいか」「身についたか」と細かく質問をした。生徒は「とても肯定」「まあまあ肯定」「中間」「まあまあ否定」「とても否定」の5段階で回答した。それを集計し、%を単位としてまとめたものが、次の表である。

学習場面1『図や表、グラフ、試料などを読みとること。』

	とても肯定	まあまあ肯定	中間	まあまあ否定	とても否定
大切か	44	51	4	1	0
易しいか	2	26	39	28	3
好きか	13	37	29	16	2
身についたか	15	47	29	6	1

※単位は (%)

学習場面2『資料から読みとったことについての理由や原因について考えること。』

	とても肯定	まあまあ肯定	中間	まあまあ否定	とても否定
大切か	48	41	5	4	0
易しいか	1	7	31	45	14
好きか	13	28	35	21	1
身についたか	16	36	31	15	1

※単位は (%)

学習場面3『資料からよみとったことを、いくつか結びつけて法則性を見出すこと。』

	とても肯定	まあまあ肯定	中間	まあまあ否定	とても否定
大切か	35	46	11	6	0
易しいか	1	11	31	42	14
好きか	10	24	41	22	2
身についたか	11	27	41	18	1

※単位は (%)

学習場面4『学習したことが、身のまわりの出来事にあてはめられるかどうか考えてみること。』

	とても肯定	まあまあ肯定	中間	まあまあ否定	とても否定
大切か	24	43	23	9	1
易しいか	2	16	42	34	5
好きか	9	21	46	21	1
身についたか	9	21	45	21	2

※単位は (%)

以上の学習場面に関する実態調査から、次のような点を挙げることができる。

第一に、社会の学習における上記の四つの学習場面について、設問にもよるが、6割から9割くらいの多くの生徒たちが大切であると考えているということである。

第二に、大切であると考えている生徒が多いわりに、「実際に身についたか」という設問に対しては、学習場面1から学習場面4にかけて、肯定的な答えが少なくなっている。特に学習場面3と学習場面4の肯定的な答えが少ない。

また、第三に学習場面3と学習場面4に限って言うと、「大切か」という設問に対する肯定的な答えが学習場面1や学習場面2に比べて少ない。これは、なぜだろうか。

それは、これまでの社会科の授業の中に、学習場面1や2、すなわち「図やグラフの読み取り」

や「因果関係について考えること」などは組み込んできたが、学習場面3や学習場面4のような「法則性を見出す」や「身のまわりの出来事にあてはめる」などを組み込む場面がきわめて少なかったことによるのではないだろうか。だからこそ、生徒たちにとって、社会科の授業では「法則性を見出す」等の重要性が十分に認識されていないし、「身についた」と感じている生徒も少ないのではないだろうか。

これらの学習活動こそが、本研究の求めている知の構造化なのである。このような学習場面を、歴史的分野でも設定し、繰り返し学習することで、多くの生徒たちが「身についた」という実感を持つのではないだろうか。

【戦争に関する生徒たちの意識についてのアンケート】

調査対象：附属中2年C組 男子22名 女子22名 合計44名 調査月日：8月29日

戦争についてどう思うか、生徒に対して、次のような質問をした。生徒は、「そう思う」「どちらかというとそう思う」「どちらかというそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答した。それを集計し、%を単位としてまとめたものが、次の表である。

設問1『戦争は、兵士だけではなく、多くの人が犠牲になると思う。』			
そう思う	どちらかという そう思う	どちらかという そう思わない	そう思わない
93	5	2	0
※単位は (%)			
設問2『戦争は、多くの人が犠牲になるので、よくないことだと思う。』			
そう思う	どちらかという そう思う	どちらかという そう思わない	そう思わない
77	18	5	0
※単位は (%)			
設問3『戦争は、多くの人々が犠牲になるというマイナスな面以外の面もあると思う。』			
そう思う	どちらかという そう思う	どちらかという そう思わない	そう思わない
14	7	25	52
※単位は (%)			

生徒意識調査から、次のような点が言えるのではないだろうか。

戦争に対しては、生徒のこれまでの学習や生活経験上、多くの人が犠牲となり、よくないことだと思っている生徒が、圧倒的に多い。よって、戦争に対してマイナスな面以外にはないと答えている生徒は、7割以上である。

しかしながら、戦争に対してマイナスな面以外の面もあると指摘している生徒も少ないながらもいる。その生徒たちの自由記述には、「戦争によって科学技術や産業が発達する」という意見も見られる。

以上の点から、中学生の戦争に対する意識は（大人であっても同じであると思うが）、戦争は悲惨なものであり、決してよくないことであるという意識である。戦争がもっている悲惨な面以外の面まで、気づいている生徒はごくわずかであり、その生徒たちも科学技術や産業の発達という面にとどまっている。この生徒たちの社会認識を、本単元を学習することによって、深めたいと考える。具体的には、戦争に対して悲惨な面だけではなく、歴史の中での戦争がどのような意味をもっているのかという認識まで深めたいと考えているのである。

5. 指導目標

- (1) 第一次世界大戦によって、何が変化したのかを興味・関心をもって追究させる。
- (2) 第一次世界大戦によって、近代国家がどのように変化したのかを考察させる。
- (3) 第一次世界大戦が、それ以前の戦争と違っている点について、具体的な資料から読み取らせる。
- (4) 第一次世界大戦の原因や経過、その後の国際社会について理解させる。

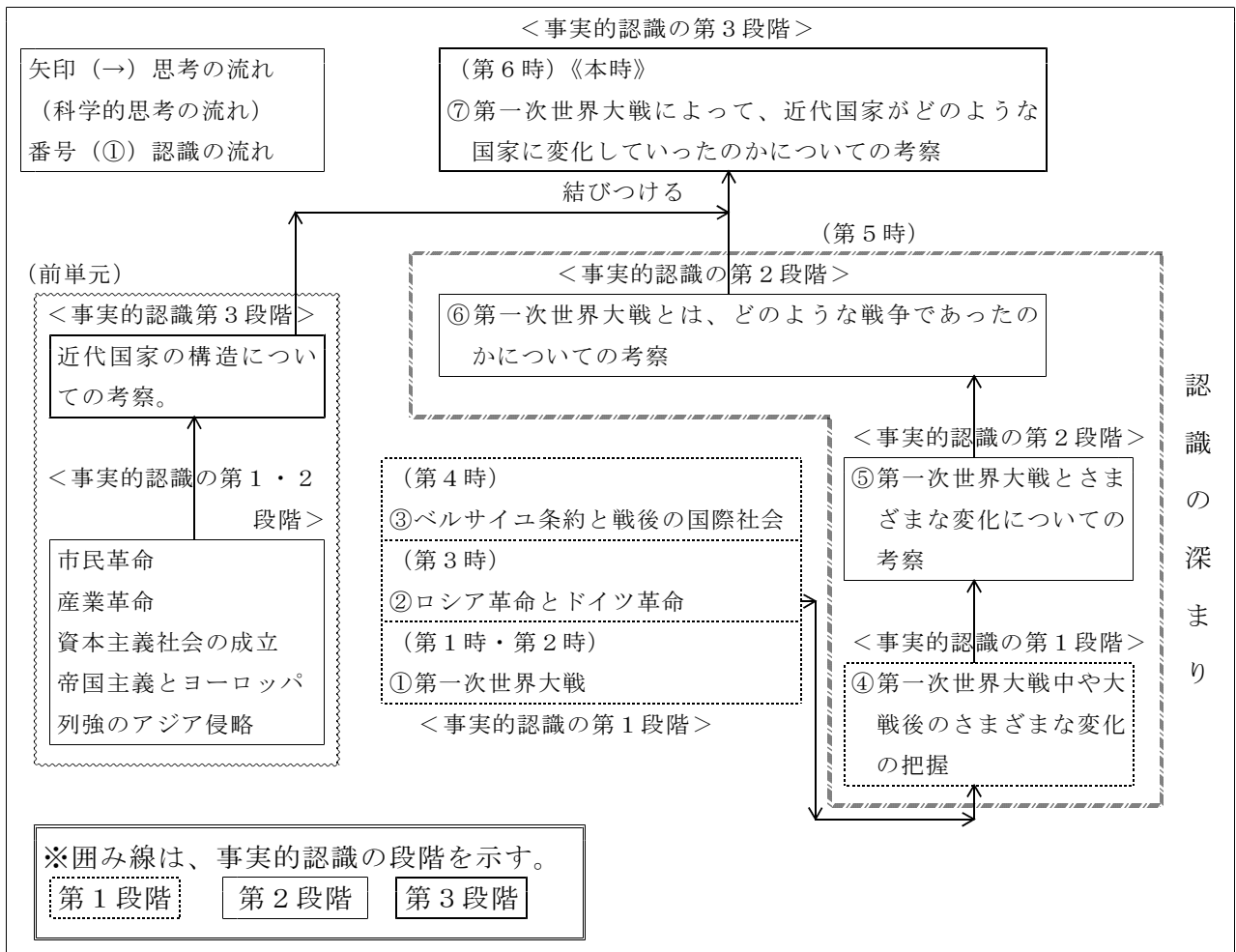
6. 指導計画

項目	学習内容	時配	留意点
第一次世界大戦①	<p>《学習課題》 第一次世界大戦は、どのような戦争だったのだろうか。</p> <p>○第一次世界大戦の原因 ・バルカン半島の様子 ・パン＝ゲルマン主義とパン＝スラブ主義 ・三国協商と三国同盟</p> <p>○第一次世界大戦の経過 ・サラエボ事件 ・ドイツ降伏まで</p> <p>○映像資料から考える第一次世界大戦の特徴 ・塹壕戦 ・新兵器の登場</p>	1	<p>○第一次世界大戦の特色（総力戦）を、生徒がつかみやすいように、大戦の原因や経過について、事実を中心に整理して提示する。 ※【事実的認識の第1段階】</p> <p>○第一次世界大戦の特色を、生徒がとらえやすいように、映像を見る前に、視点を説明する。 ※【事実的認識の第1段階】</p>
第一次世界大戦②	<p>《学習課題》 第一次世界大戦は、それまでの戦争と何が違うのだろうか。</p> <p>○第一次世界大戦とそれまでの戦争との比較。 ・長期戦。 ・動員数、死傷者数の多さ。 ・新兵器の登場など ↓ 総力戦の意味</p>	1	<p>○それまでの戦争の一例として、「普仏戦争」を取り上げ、第一次世界大戦との違いを考察させることにより、「総力戦」の意味を明確にとらえさせる。 ※【事実的認識の第1段階】</p>
ロシア革命とドイツ革命	<p>《本時の課題》 なぜ、第一次世界大戦中にロシアとドイツで革命が起こったのだろうか。</p> <p>○ロシア革命について ・ロシア革命の原因</p>	1	<p>○なぜ、ドイツとロシアで革命が起こったのか考えさせるた</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシア革命の経緯 ・ソビエト政府の成立 <p>○ドイツ革命について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ革命の原因と経緯 <p>○ロシアとドイツで、なぜ革命が起こった背景。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・皇帝の権限が強い帝政。 ・国民生活の困窮。 ・国民生活を保障しきれなかった政府の末路。 	<p>めに、二つの革命について、事実を中心に生徒に確実にとらえさせる。</p> <p>○ドイツ革命については、教科書・資料集ではほとんど取り上げていないので、補助資料を用意する。</p> <p>○第一次世界大戦によるさまざまな変化を考えさせるために、ここでは参戦国のうち、なぜロシアとドイツで革命が起こったのか考えさせる。</p> <p>※【事実的認識の第1段階】</p>
<p>ベルサイユ条約と戦後の国際社会</p>	<p>《本時の課題》</p> <p>第一次世界大戦後の国際社会は、どのように変わったのだろうか。</p> <p>○ベルサイユ条約について</p> <p>○国際連盟について</p> <p>○戦後の国際会議や条約</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワシントン会議・パリ会議 ・ロンドン会議 	<p>1</p> <p>○戦後の国際社会について、事実を中心に生徒にとらえさせる。</p> <p>※【事実的認識の第1段階】</p> <p>○第1次世界戦前と比較させ、大戦後の国際社会がどのように変化したか考えさせる。</p> <p>※【事実的認識の第2段階】</p> <p>○ワシントン会議・パリ会議・ロンドン会議は、教科書・資料集では、ほとんど取り上げられていないので、補助資料を用意する。</p>
<p>第一次世界大戦のまとめ①</p>	<p>《本時の課題》</p> <p>第一次世界大戦は、どのような変化をヨーロッパにもたらしたのだろうか。</p> <p>○第一次世界大戦による変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロシア革命・ドイツ革命 ・民主的な憲法（ワイマール憲法） ・国際連盟の創設 ・女性の社会進出 ・社会福祉政策の充実 <p>○上記の変化の理由（第一次世界</p>	<p>1</p> <p>○既習事項から、第一次世界大戦による変化を思い出させる。</p> <p>○新しい資料から、第一次世界大戦による社会の変化にも気づかせる。</p> <p>※【事実的認識の第1段階】</p> <p>○左記のさまざまな変化と、第一次世界大戦が「総力戦」であったこととを関連づけて考</p>

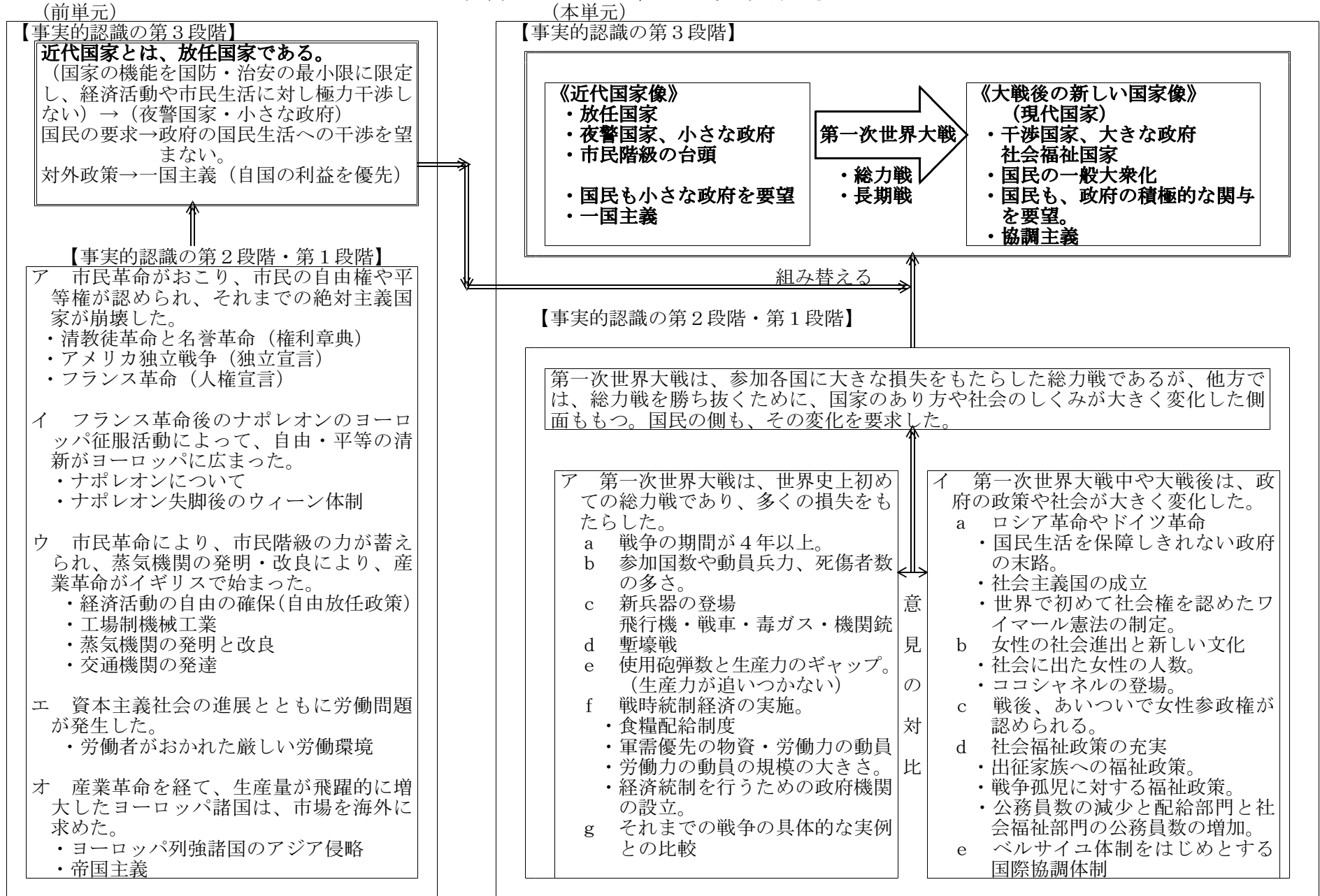
	大戦と関連づけて)		察させる。 ※【事実的認識の第2段階】
第一次世界大戦の まとめ②	《本時の課題》 第一次世界大戦によって、国家の しくみはどのように変化したのだ ろうか。 ○近代国家のしくみの構造化 ○第一次世界大戦後の国家のしく みの構造化 ○上記の変化の理由（第一次世界 大戦による変化と関連づけて） → 8. 本時の指導を参照	1 本 時	○近代国家のしくみを思い出さ せる。 ○前時の学習内容をもとに、近 代国家がどのように変化する のか、第一次世界大戦後の国 家像を考察させる。 ※【事実的認識の第3段階】

7. 単元の構成



※「本単元における思考・認識の流れ」は別紙参照

本單元における生徒の思考・認識の流れ



8. 本時の指導

(1) 内容

第一次世界大戦のまとめ ～総力戦による近代国家の変容～

(2) 目標

第一次世界大戦により、近代国家がどのように変容したのか、明確な根拠をもとに考察し、説明することができる。

(3) 展開

●学習内容

○一般的な留意点

★研究テーマに即した留意点

時配	学習活動と内容	指導上の留意点
5	<p>1. (前時の復習)</p> <p>第一次世界大戦とは、どのような戦争だったのか、前時の最後にまとめた意見を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第一次世界大戦は、総力戦ゆえに大きな損失や悲劇をもたらした戦争である。 ●第一次世界大戦は、総力戦ゆえに社会のさまざまなものを変化させることになった。 	<p>★T1：前時の最後にまとめた内容を発表させる。悲惨な側面と、社会などの変化をもたらしたという側面と、両方の側面が出てくるように指名する。</p> <p>★T1：本時の課題に、生徒が迫りやすいように、確実に思い出させる。</p> <p>○T2：出てきた意見を整理して、板書する。</p> <p>※【事実的認識の第2段階】</p>
	<p>第一次世界大戦によって、国家のしくみはどのように変化したのだろうか。</p>	
5	<p>2. (課題の把握)</p> <p>第一次世界大戦によって、さまざまなものが変化した。国家のしくみも大きく変化したことを知る。</p>	<p>○T1：課題を提示し説明する。</p> <p>★T1：個々の社会事象よりも、もっと大きな枠組みのものも変化したことを強調する。</p>
5	<p>3. (復習)・・・班学習</p> <p>前単元で学習した、第一次世界大戦前の国家(近代国家)のしくみの構造図を思い出す。→近代国家のしくみについて、次の4つの視点から、具体的に思い出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●政府と国民の関係 ●政府 ●国民 ●対外関係 	<p>○T1：ワークシートを配布。</p> <p>○T1：近代国家のしくみについて、前単元の復習であることを説明し、思い出しやすいように助言する。</p> <p>★前の単元の具体的な内容を思い出すように助言する。(市民革命・産業革命・資本主義社会など)</p> <p>★次の課題追求のためには、近代国家像を確実に思い出させる。</p>
30	<p>4. (課題追求)・・・班学習</p> <p>近代国家のしくみが、第一次世界大戦によって、どのように変化していくのか考える。→近代国家のしくみが、第一次世界大戦によって、どのように変化したのか、近代国家の構造図をもとに班で考える。次の4つの視点で考える。</p>	<p>○T2：班を作ることを指示。</p> <p>○T1：課題の説明を行う。</p> <p>○T1、T2共に半分ずつの班を担当し、担当の班をまわる。</p> <p>★各班をまわりながら、構造図の作り方(矢印の意味など)を説明・質問しながら生徒の話し合い活動を活性化させる。</p>

	<p>●政府と国民の関係 ●政府 ●国民 ●対外関係 →近代国家のしくみが変化した理由について、第一次世界大戦により変化したことと関連づけて説明する。</p> <p>5. 班毎に前に出てきて発表する。 6. 他の班の発表について意見を発表し合う。</p>	<p>※【事実的認識の第3段階】</p> <p>★国家のしくみが、このように変化した理由を、前時で行った第一次世界大戦による変化と関連させて考えるように、助言する。</p> <p>※【事実的認識の第3段階】</p> <p>○発表の時は、その班の担当のTが近くに待機。必要に応じて、支援する。 ★T1：生徒同士の議論がしやすいように、論点を提起する。</p>
5	<p>7. まとめ 本時のまとめを、ワークシートに記入する。他の班の意見と自分の班の意見とを比較して考えたことや、議論を聞いて考えたこと等をワークシートにまとめる。</p>	<p>○T1：まとめの説明をする。 ★これからの学習により、本時で学習した現代国家像がより明確になってくることを説明する。</p>

(4) 評価

- ① 第一次世界大戦によって近代国家がどのように変化していったのか、政府と国民の関係や対外関係という視点から、大戦後の国家像について構造化することができたか。(構造化図を完成させることができたか。)
- ② 上記①のように変化した理由を、第一次世界大戦により変化したことと関連させて説明することができたか。
(ワークシートへの記入内容を評価する。)
(T1とT2が授業後に行う。ワークシートの記述内容により、生徒がどの程度近代国家像や現代国家像が構造化できたかを評価する。)
- ③ 積極的に話し合いに参加することができたか。
(T1とT2が授業中に観察することと、授業後のワークシートの記述内容を見取ることにより評価する。)